

東京神學大學報

TOKYO UNION



THEOLOGICAL SEMINARY

No. 338

JULY 17, 2026

●日本伝道フォーラム

講演1 「現代日本で福音伝道を考える——大学と教会の間」

宮城学院女子大学 学長 芦 名 定 道

講演2 「日本伝道の明日を拓いていくために」

日本基督教団高知教会 牧師 黒 田 若 雄

全体報告

東京神学大学 教授 中 野 実

●キリスト教学校伝道協議会

特別講演 「キリスト教学校における後継者養成の幻」

立教学院 院長、立教大学 総長、キリスト教学校教育同盟 理事長 西 原 廉 太

発題 「『存在性の価値』を大切に」

捜真バプテスト教会 牧師 小 野 慈 美

「キリスト教学校の使命とこれから一名古屋学院大学の取り組みから」

名古屋学院大学 宗教部長 神 山 美奈子

●一般時間

講演「ブラジル宣教の現場より」 日本基督教団 隠退教師・ブラジル宣教師 小井沼 眞樹子



2026年度 東京神学大学・大学院入学式

現代日本で福音伝道を考える ——大学と教会の間

宮城学院女子大学 学長 芦 名 定 道



一 はじめに

困難な時代にも福音を語ることは教会の使命であり(二テモテ四章一〜八節)、礼拝説教は、現代日本人に福音のメッセージを届ける上で、その中心に位置している。この点を確認した上で、この講演では、メッセージの内容よりも、その形・形態(届け方)に焦点を合わせたい。ここで、メッセージの内容と形態との区別を行うにあたっては、テイリツヒの「相關の方法」の拡張を意識しており、キリスト教弁証学的な問いの立て方とお考えいただきたい。

二 現代日本という問い(問いとしての現代日本)

伝道について考える際に、伝道対象である現代日本人についての考察、特に現代日本人がどのような宗教的問いをもっているかの分析は必須事項である。しかし、真の問いは当事者が意識しているとは限らないこと、つまり、本当の問いはしばしば隠れていることに留意しなければならない。問いは分析の対象とならざるを得ない。現代日本を特徴づける言葉としては、保守化、戦争、民主主義・人権の危機、人口減少、科学技術(ネット、AI、原子力、遺伝子)など、すぐに思い浮かぶと思われるが、ここで注目したいのは人口動態である。というのも、人口動態こそが最も信頼できる未来の予想データだからである。国立社会保障・人口問題研究所によれば、日本の総人口は

二〇二〇年の一億二六二五万人から、二〇四五年の一億八八〇万人を経て、二〇五六年には一億人を割って九九六五万人となり、二〇七〇年には八七〇〇万人になると推計される。また二〇五〇年の平均世帯人員は一・九二人になり、二〇二五年の男性高齢単独世帯の六割は未婚と予想される。これはどんな未来だろうか。これに日本の死亡者数(二〇三〇〜二〇四四年は毎年一六〇万人超)の見通しを重ね合わせると、少子高齢化、そして多死社会という現実が浮かび上がり、現代日本人は、すべての年齢層にわたり、共同体喪失の危機に直面していることがリアルに可視化される。この状況は、半ば無意識の不安(希望喪失)として社会に蔓延し、しばしば人びとは、過剰に保守化し(判断放棄)、凶暴化してしまう。同様の動きは、宗教研究で「第三次宗教ブーム」(一九七三年以降、第一次オイルショック・第四次中東戦争)と呼ばれる時期に現れた。それは、当時の新宗教の動向から読み取ることができる。新宗教が大学キャンパスで活発に活動し、後にオウム真理教や統一協会による大問題を引き起こした。現代日本がさしかかりつつあるのは、こうした現実であり、その中で現代日本人は真の故郷・希望を希求しているのではないだろうか。

三 伝道IIメッセージを届ける、実例に即して

なぜ福音のメッセージは現代日

本人に十分に届かないのだろうか。その原因は単純ではないが、キリスト教伝道を担う諸教会が内部対立とまでは言わないとしても互に協力することができずにいる(第一コリントの冒頭でパウロが指摘するような)、伝道ネットワークの機能不全があげられるだろう。孤立しているのは、現代の日本人だけではなく、日本のキリスト教界ではないだろうか。特に、私が最近感じるのは、大学と教会の間のネットワークである。宮城学院女子大学でも、他のミッショナリースクール同様に、大学礼拝が実施され、近隣教会の牧師の方々に説教を担当いただいている。しかし、この大学と教会との関わりが伝道として機能しているかとなると評価は厳しいものになるかもしれない。必要なのは大学と教会をつなぐ中心的なセンターの存在である。日本伝道において強化すべきは、この点なのではないだろうか。

四 むすび

現代人は教会も大学もあまりに多忙であり、創造的な活動を持続的に行うことが困難になっている。日本伝道を担う人々には、自分だけで問題を抱え込まないこと、互いに支え合うネットワークを作ることを心がけていただきたい。その手がかりは、聖書そのものに(イエスの神の国宣教のあり方)、現代の神学者(ボンヘッファーなど)にも見いだすことができるだろう。

学長室から

学長 神代真砂実

この学報がお手許に届く頃には、学期末が目前に迫り、学生たちはテストやレポートなどの課題に追われているでしょう。その中で夏期伝道実習に送り出される学生たちは、派遣を目前にして、学業に並行して、その準備にも心を砕かなければならず、一段と忙しいことでしょう。そして、もちろん、修士論文の作成に当たる最終学年の者たちも、いよいよ論文の執筆の大きな山場を迎えることとなります。

東京神学大学では修士論文の提出は夏休みの終わり頃(9月半ば)に設定されています。これは大学としては珍しいことでしようが、修士論文というかたちで学業(学術的な営み)に一つの区切りをつけられた者たちだけが、最後の学期に教会での実践的な諸課題を学ぶ課程に進むことができるというのが、東京神学大学のカリキュラムの伝統的なかたちです。

今年度は9名が修士課程の修了に向かって歩みを進めています。日本基督教団には、その内の6名を送り出すことができるのではないかと思います。決して多いとは言えない人数ですので、新卒者を求める声に今年度も十分に応えられそうにありません。とても残念に思っています。もともと多くの卒業生を送り出すには、もともと多くの入学者がなければなりません。ぜひ自分たちの教会の将来を託せる人を見出していた頂き、東京神学大学での学びへと送り出してくださいように。

日本伝道の明日を拓いていくために



日本基督教団高知教会 牧師 黒田 若 雄

一、問題の所在

今、ほとんどの教会は、教会員数の減少やそれに起因する教会会計のひっ迫という現実の前に立たされている。その中で、どう伝道をしていくかということを探る動きが強まっているように思う。しかし、そのことに重心が置かれると、結局方法論に傾斜するのではないか。このような厳しい現状であるからこそ、「伝道は神の御業」との原点に立ち戻らなければならないことを強く感じている。

一方で、「伝道は神の御業」との言葉を定理のように語ることで済まないことも明らかである。本当の意味で「伝道は神の御業」との言葉が、教会において生きた言葉となっているか、そのことが問われなければならない。第二次大戦期に高知教会の牧師として歩んだ霜越四郎氏は、著書「伝道姿勢の教会へ」において「(教会は)正しい伝道姿勢をもって生き働いているだろうか」と問うた。この問いの前に、私たちも立たなければならないと考え、「伝道は神の御業」との言葉に真の意味で立つ教会の姿、伝道姿勢の教会の姿とはどういうものなのか。

二、力の源泉をどこに見るのか

霜越牧師の言葉を借りれば、伝道はキリストによって手ずから授けられ、遂行すべき使命である。神から託され、神から力を頂くからこそ、教会は伝道という使命を担っていくことができる。それゆえに、教会が伝道を進めていく上

で最も大切なことは、神から力を受けることであることは明らかである。私たち人間の側の能力や確信によって伝道を進めていくわけではない。ただ神から力を受け、用いていただく。これ以外にない。

教会が神から力を受ける場はどこであるのか。それは、礼拝においてであり、説教においてである。この言葉に、誰も異存はないと思う。では、本当に教会が神から力を受けているのか、考えていく必要があるのではない。もし、教会が伝道力を失っているように見える現実にあるとすれば、真の意味で神から力を頂いて歩んでいるのか、その働きを説教が担うことができるのか、考える必要がある。

三、伝道力を得ていくために

霜越氏は、前述書において、説教の課題として「不必要な外国語やその直訳を意味する神学用語多く、学者の名やその引用句が羅列され」と言っている。これは、求道者への説教の課題として言われているが、そのまま私たちの課題であることを思われる。本当の意味で、説教が力あるものとなっているのか、霜越氏が取り上げて課題に示されている課題を思わせる。

今後の伝道を進める上で考えなければならぬ課題を探るため、四国教区宣教研究委員会が信徒の声の聞き取りを行った。信徒の声の中に示されていたのは、礼拝への期待、それも説教に対する期待

であった。そして、信徒の思いと牧師の思いとの間にずれが生じていることを受け止めさせられた。牧師は、正しく福音を語ることを目指している。信徒も、正しく福音を語ってほしいという期待を強く持っている。しかし、そこで期待しているのは、単に教科書的に語られる正しさではなく、牧師自らは福音に打たれ、信じさせられている真理を示す言葉、信仰告白的な言葉を求めていることを示された。その言葉によって力を与えられたいと願っている。

こうして見てくると、教会の伝道力は、人間の意識や努力によって与えられるものではなく、神の語り掛けである説教によって与えられることを思われる。その教会に神が語り掛けておられる声を聞き取って届ける、そういう形で実現していく説教において、教会は新しい力を受けていく。そこにこそ、本当の意味で教会を「伝道は神の御業」との原点に立たせていく道筋があることを思われる。

改めて、説教はどう語るかではなく、どう聴くかが課題であると考え。説教者の役割は、既知の事柄をどう印象的に語るかではなく、新しく神の恵みに出会う、その期待を持ち御言葉に聴くことである。説教者自身が、不安や悩みを抱えている一人の信仰者として率直に御言葉に聴いていく。その時に、御言葉は、人間の思いを超える力を指し示す。それを聞き取って、教会に届ける。そうして、

説教者としての役割を果たしていくのではない。そうであるからこそ、説教者が持つていると思っている正しさではなく、御言葉によって示される神の御心がそのまま伝えられるところに、正しさが生まれることを思う。そういう言葉を聞き語っていく働きへと、私たち説教者は召されているのではない。

四、新しい言葉を求めて

そして、今こそ、人間の抱えている現実が、御言葉の光の下で新しく捉え直させられていく必要がある。例えば、人間の罪の問題について、日本社会に生きる多くの人たちが本当の問題を罪と認識しないまま、行き詰まりを抱えていることを思う。その人々に罪に関する教理の言葉をそのまま伝えるだけでは、届かないことを思う。その人々の感じている罪の実感を入り口としながら、そこに共に立ち、共に聖書の示している罪の意味を聞き取り、その赦しを受け取って共有していく。そのためには、まず自分の罪が赦されているとはどういうことか、御言葉から新しく聴いていくことが求められている。そうして、人々の抱える現実と共に立つて御言葉に共に聴く。そこに、日本に生きる人たちを生かしていく言葉を発見していく糸口があるのではない。そうして御言葉に聴くところに日本伝道の明日は拓かれていくのではないかと考える。

日本伝道フォーラム全体報告



東京神学大学 教授 中 野 実

神様のお導きのもと、「第7回日本伝道フォーラム」を2026年6月1日(月)～2日(火)に無事開催することができました。全国の牧師、伝道者、神学校の教員、神学生、総勢95名が東京神学大学(東京都三鷹市)のキャンパスに集まり、「届けよう、福音を日本伝道の明日を拓くために」という主題のもと、共に学び、共に語り合う貴重な二日間を過ごすことができました。

1990年に始まった(日本伝道フォーラムの前身)「日本伝道協議会」は、日本基督教団の抱えている様々な問題、課題を取り上げ、共に神学的に学びながら、教会を建てていくためのヴィジョンを構築する貴重な機会でした。例えば、1990年代には「福音理解の一致を目指して…日本基督教団の危機の中で」、「日本基督教団の崩壊はどこまで進むのか…聖餐の乱れと教職の問題」などという主題が掲げられていました。その後も、「伝道」、「聖書」、「信仰告白」、「合同教会」という重要テーマを取り上げながら続けられました。しかし、日本基督教団の状況も少しずつ変化していく中で新しい方向性を模索することが必要となり、数年間にわたって地方大会という試みも行われました(名古屋、大阪、仙台、九州、長野で開催)。

また、参加者の顔ぶれの変化、参加者の減少という問題に直面し、もう一度仕切り直しが必要となりました。そこで、2018年度からは名称も「日本伝道フォーラム」と改め、テーマ毎のワークショップ(ユース伝道、コンテンポラリー・ワークショップ、家族伝道、小規模教会の伝道)、「日本伝道のた

めに祈る会」を持つなど、内容的にも工夫をほどこしました。しかし、まもなくしてコロナの危機に巻き込まれ、3年間はオンラインでの開催となりました。やっとコロナの危機を乗り越え、次は準備委員会の再編という課題が浮上してきました。しかし、コロナ後最初の対面開催を2025年度になんとか実現することができ、続く今回の「日本伝道フォーラム」は、新しく結成された準備委員会による最初のフォーラムとなりました。

今回の主題は、「届けよう、福音を…日本伝道の明日を拓くために」でした。6月1日(月)の一日目は、小泉健先生による開会礼拝から始まり、二つの主題講演を聞きました。一つ目は、宮城学院女子大学学長の芦名定道先生による講演「現代日本で福音伝道を考える―大学と教会の間―」です。伝道という課題を考えるために、まず「現代日本をどう見るか」という問いをきっかけ、人口動態に関する具体的なデータに基づく分析を示してくださいました。そこから見えてくるのは、共同体の喪失という課題であり、福音のメッセージを説いてくださいました。持続的に連携する形で築かれるネットワークとして、教会と大学(学校)の協力関係はもちろん、継続的で強力な「伝道センター」の必要性という具体的な提言もなされました。

二つ目の主題講演はシンポジウム型で行われ、主題に関わる発題を黒田若雄先生(高知教会)が、それに対する応答を、藤掛順一先生(横浜指路教会)と須田拓先生(東京神学大学)が担当されました。黒田先生は発題を通して多くの問いを提起してくださいました。「伝道は神の御業」という真理に立ち戻りつつも、その真理が本当に教会を生かしているのかと問われます。そして教会が真の意味で力を受けていくのは、礼拝という場であり、そこで語られる説教によってではないのかと問われ、説教をめぐる課題を取り上げてくださいました。とくに信徒の声に耳を傾けることの重要性を説かれておられたことが印象的でした。続く応答においては、「伝道は神の御業」という神学的主題をそれぞれの立場から展開してください、聞き応えのある素晴らしい発題となりました。私たちは、神の伝道の御業の中でのほんの一端を担わせていただくのであり、神の伝道の御業の邪魔をしないこと、そして世の終わりの救いの完成を信じて待ち望むことが大切であるという藤掛先生の言葉がとくに印象的でした。

一日目最後のプログラムは、テーマ毎のグループに分かれてのワークショップでした。テーマは次の通りです。「福音とは何か」(発題…本城仰太先生)、「伝道とは何か」(発題…小宮山剛先生)、「伝道者とは何か」(発題…小堀康彦先生)、「青年伝道とは何か」(発題…寛牧人先生)。共に夕食をいただきました。6月2日(火)の二日目は、「伝道報告・信徒の思い」と題するプログラムを午前中に持ちました。まず、お二人の牧師からそれぞれの立場から伝道報告をいただきました。内城恵先生(羽咋教会)からは「能登半島地震を経験して、震災後の教会のあり方を考える」と題する報告を、そして山下瑞音先生(東舞鶴教会)からは京都教区における伝道の課題について、そして「教会広報ラボ」という新しい試みのご紹介をいただき、多くの参加者の関心を集めました。次に、「信徒の声を聴く」という視点で、お二人の信徒の方々にご登壇いただきました。一人目は、富士見町教会信徒の境和彦さんで、ご自身の信仰の歩みを通して教会の大切さをお証しくくださり、また「長老自主勉強会」など、ご自分が関わっておられる活動についてご紹介くださいました。二人目は、三島真光教会信徒の脇萬里子さんで、三島真光教会の歩みをご紹介くださり、現在無牧で、代務体制の中であつてどのような工夫をしながらその歩みを支えているか、またご自身が関わってこられたアシシラムなどの働きについてもお話しくださいました。

二日目の午後は、六つのグループに分かれての分団協議が行われました。それぞれ活発な議論が展開されたようで、最後の全体会では、その議論の成果を持ち寄り、紹介する時間を持ちました。このように濃密な二日間を過ごし、それぞれが遣わされている場所へと再び戻っていききました(台風の影響があり、しばらく足止めをくった参加者もおられたようです)。このような充実した集会を準備することは容易ではありません。新たに結成された準備委員会の先生方の労を多とするとともに、ご協力くださった東神大の事務員の方々にも感謝申し上げます。

キリスト教学校における後継者養成の幻

立教学院 院長、立教大学 総長、キリスト教学校教育同盟 理事長
西原 廉太



キリスト教学校には、それぞれの「建学の精神」にもとづく共通の指標がある。第一には「真理を探究することができ」る。すなわち、①普遍的なる真理を自由に、かつ謙虚に探究することができ、②神から与えられた才能、資質を伸ばし、科学的知識を培い、技能を磨くことができる、③伸びやかな発想で自分を表現し、知性を広げ、望みを高くすることができ、④自分の殻を破り、これまでに身につけ、無意識のうちに自分を閉じ込めてきた殻を破って、自分を解放することができ、ことである。第二には、「一人ひとりの存在を大切にすることができ」る。すなわち、①神を畏れつつ、世界、社会、隣人、すべての「いのち」のために、愛をもつて仕え、共に生きることができ、②神の前では、一人ひとりの人間が等しい意味と価値を持ち、神から愛されるかけがえのない存在であり、尊重されなければならないことを、理解することができ、ことである。

これらの「痛み」に寄り添う働きが、「職業」「天職」なのである。「職業」を英語では、*vocation* や *calling* と言うが、それはラテン語の *VOCARE*（召命＝聖職者という使命に神に召されること）に由来する。それらの働き人こそが「聖職者」なのである。

こうした人間を生み育てることが「大学」(College)の務めであった。それは同時に、究極的には、私たちキリスト教学校の使命であり、建学の理由にほかならない。Collegeとは、12、13世紀に修道院から派生したもので、教員と学生が共に祈り、共に生活し、共に学ぶ空間のことであった。真理を探究する無限の旅を共にする場である。時代を超え、空間を超えて真理を探究することのできる「場」こそが、キリスト教学校のルーツなのである。

2009年に立教大学に招いたフランク・グリズウオルド元米国聖公会総主教は、このように語られた。「キリスト教の学校とは真理を味わう場であり、学生、教員とは真理を探究する旅人である。キリスト教学校は学生の「character」を形成する場である。「character」とは単に、性格とか人格ということではなく、(自らの弱さや不確かさを自覚する変化を恐れない精神)を意味する。だからこそキリスト教学校は真理を探究するために常に開かれていなければならない。閉じられてはならない。自らが試される、自らが否定されることを恐れてはならない。ことにキリスト教を規範とする学校はそのような意味で「危険な場」でなければならないのである。

ことを恐れず、真理とは何かにこたわり続けること。自己の存在を知り、他者の存在に気づき、人間を学び、世界を読み解くこと。いわゆる「常識」「定説」を疑うこと。「權威」を問い、相対化させること。自らオリジナルの原書・原文、第一次資料にあたり、読み、確かめること。日本にないものであれば、実際に海外にまで出かけていき、自分の目で確かめなければならぬ。そのためには、必要な言語を修得する必要がある。ただ単に英語ができるようになることが目標なのではない。何のために外国語の修得が必要なのか、が重要なのである。私たちキリスト教学校が語るべき「グローバル」とはこういうことである。

マタイによる福音書第4章1～4節には、こう記されている。

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、⁴⁰霊に導かれて荒野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてある。

ここでイエスは、旧約聖書の「申命記」第8章3節の言葉を引用されている。また、エレミヤ書第15章16節にはこうある。

あなたの御言葉が見いだされたとき、わたしはそれをむさぼり食べました。あなたの御言葉は、わたしのものとなり、わたしの心は喜び躍りました。

預言者エレミヤが迫害に遭いな

がらも、神から「預かった」言葉を民衆に語り続けたのは、神の言葉を読んだからではなく、神の言葉をむさぼり食べたから、であった。預言者やイエスは、人々に対して、「悔い改め」を求めた。「悔い改め」とは、新約聖書が書かれたギリシャ語の原語では「メタノイア」と言うが、それは本来「視点を変える」「生き方を変えること」とを意味する。そうした、視点を変えていくこと、生き方を変えていくことは、実は、神の言葉を「食べる」ことによって実現するのだ、ということなのである。

確かに、「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」のである。

旧約聖書の左近淑先生は、こう語られている。「聖書に生きる人はみな、聖書を読み捨てて生きた。聖書は読むものではない。食べものである。」聖書を読むことは、「言」を噛み砕きながら食べ、真理を味わう行為なのである。私たちキリスト教学校は、ことに「言葉」を大切にすべきである。子どもたちに「言葉」を食べさせることは、私たちの重要なミッションなのである。

この世界、この社会の片隅で、さまざまな困難や悲しみ、孤独の中で、声を出すことができないでいる者、かすかな声で癒しと救いを求めることができる人々の存在を、聴き取ること。そのためには、私たち教員、職員、一人ひとりが、声を出すことができないでいる子どもたち、かすかな声で癒しと救いを求めている人々の存在を、聴き取ることができるとならなければならない。これこそが、私たちキリスト教学校の使命、ミッションであり、「伝統」にほかならない。

キリスト教学校の使命とこれから

一名古屋学院大学の取り組みから一

名古屋学院大学 宗教部長

神山 美奈子



名古屋学院大学は、1887年に米国のメソジスト・プロテスタント教会の宣教師であるフレデリック・C・クラインによって設立され、建学の精神として「敬神愛人」を掲げて139年の時を紡いできました。大学開学は1964年、改革派神戸神港教会の会員で経済学者の福田敬太郎によりはじめられました。現在、自然豊かな瀬戸キャンパスと名古屋市熱田区にキャンパスを構え、9学部、大学院2学科、留学生別科、合わせて約6300名の学生が通っています。

キリスト教科目は、専任教員3名、非常勤講師3名が担当し、必修科目として「キリスト教概説」が通年、選択科目として「聖書学」「キリスト教史」「キリスト教倫理」が1学期間受講の授業として開講されています。授業では、建学の精神に関する内容をはじめキリスト教の基礎的な学びが主な内容ですが、学生たちがキリスト教や聖書に親しみを持てるように、各教員により様々な工夫がされています。そして、キリスト教の暦を習慣づけるために年間聖句や月間聖句の提示、月毎の讃美歌、教会出席のための教会一覧表などを作成し配布していますが、これは学生のみならず、教職員用に会議や授業で気軽に活用できる「祈りのカレンダー」(年間・月間聖句の他に聖句の解説とはじまり

の祈り・終わりの祈りの言葉を収録)を共通データとしていつでも閲覧できるようにしています。キリスト教科目を担当する教員とキリスト教センターの職員は協力して学生たちのキリスト教教育に力を注ぎ、「子ども扱いすることなく」「共に学ぶ姿勢」を大切に、「キリスト教に対する先入観を深めないように」、なるべく興味を抱くことができる教案やチャペルニュースの作成に努めています。キリスト教信仰を強いることはありませんが、「教養」として学ぶことで、いつの日か信仰に目覚めることもある、今は与えられた種蒔きの時であると信じ、学生や教職員のみなさんに対してキリ

スト者の背中を見せることができればと願いつつ働きに従事しています。校内のキリスト者の割合が低いこともあり、教職員のみならずへの奨励も欠かすことができません。主目にはなるべく行事を入れないこと、そして建学の精神を浸透させるために必要な研修会などを実施していますが、何よりキリスト教関係者がすべての教職員との豊かな関係づくりに努め、信頼関係から得られる相互理解が大変重要であると気づかされる日々を送っています。今後とも応援とお交わりをよろしく願っています。

『存在性の価値』を大切に

捜真バプテスト教会 牧師

小野 慈美



キリスト教学校の使命の一つは、「神による根本的な存在肯定」という見えない真理を伝えることだと思います。私が勤務する捜真幼稚園を卒園した男子学生に、「幼稚園での一番の思い出は何か」と尋ねたところ「自分はこの園で大切にされたな」ということを覚えています」と答えてくれました。自由保育の幼稚園では、能力を比較して序列をつけるという場面はほとんどありません。しかし、小学校以降は、何らかの形で評価がされ序列が付けられます。上の学校に進むにつれ、一般的には、偏差値による評価のプレッシャーは強くなります。それは、キリスト教学校であろうとなかろうと変わりません。その圧力の中で、「神による根本

的な存在肯定」をいかにして伝えるたらいのしょう。有用性の価値と存在性の価値
有用性の価値…能力や貢献度などで測られる価値。①上下・優劣がつけられる②付随的③代わりがきく④条件付き(期待や、基準に達したときに良しとされる)存在性の価値…その人がその人であるという価値。神が創られたゆえに尊い。①比較できない②本質的(状況に左右されない)③代わりがきかない④無条件に尊い(存在価値という言葉は、上記の「有用性の価値」の意味で理解されがちなので、存在そのものに対する神の肯定の意味で「存在性の価値」を用います。二つの価値

は対立するものではありません。有用性の価値の大小が、人間の価値の大小であるかのような価値観が問題なのであって、有用性の価値を測ることは必要でもありません(向上心、適材適所)。神は存在性を愛し(「どう園の労働者のたとえ)、有用性を用いる(タラントンのたとえ)と言うこともできるでしょう。『存在性の価値』の保証が、自己肯定感を育む
学校として、個々の生徒の賜物(有用性の価値)を伸ばすことを励ましながらも、有用性の価値が全てではないことを本音で伝えること。これがキリスト教学校の大切な使命です。存在性の価値の保証が、自己肯定感を育み、隣人愛

の源泉ともなります。自分を尊い存在として愛してくださる神の愛が他者にも注がれていることを知るとき、他者への敬意が生まれるからです。『遠くを見る目』をもって「今」の教育に当たら
「真剣に生きつつも、深刻にならない」。教育への真剣さが高じて、人間の力を超えた領域まで何とかしようとする、深刻になります。深刻にならないためには、遠くを見る目を持つことです。学校が生徒たちと関わる期間は限られています。その間に「存在性の価値」の種まきをしながら、その先の生徒たちの人生に神の祝福を祈りましょう。(詩編121:8)

ブラジル宣教の現場より



日本基督教団 隠退教師・ブラジル宣教師 小井沼 眞樹子

ブラジル宣教師として召し出されてから30年の歳月が過ぎました。子育てと介護に追われていた30歳代の主婦が、神からの召命を受けるに至った経緯をかいつまんでご紹介します。10年間に及ぶ重い病床の母の介護を全うした後、夫國光に転勤辞令が下り1986年から5年間サンパウロで駐在生活をしました。その当時、南米から発信された解放の神学の書物が邦訳され、世界の構造的罪の問題が浮上していました。路上にうずくまる貧しい人々の横を通り過ぎて教会に通っている自分の姿に、信仰を根底から問われました。やがて、先進国の一員として免れない社会的罪も主イエスによつて赦されていたことに気づかされ、ブラジルで苦難する人々に仕えなさいとの召し出しを受けたのです。夫も独自に献身の決意を与えられて帰国し、宣教師になるべく5年間準備しました。

1996年3月に國光は日本聖書神学校での学びを終え、私もCコースの教師検定課程のすべての試験を突破して、そろつて准允を受け、サンパウロ福音教会に主任担任教師として赴任しました。かつて信徒として参加した教会です。それは戦後移民が中心の日本人教会で、日本語による日本的な教会生活でした。私は2000年から日系高齢者のためのデイサービス活動を始めることができ、5年間、ボランティア活動の土台作りをしました。その後、夫が不治の難病を患い、06年3月に帰国。同年8月に國光は「もつと世界に共に生きる関係性を」と望みながら天に召されました。その遺志を受けて「ラテンアメリカ・キリスト教」ネットが発足、通称ラキネットとして10年間ブラジルと日本の教会をつなぐ形で活動を続けました。私は交流部門の責任を負い、解放の神学のフィールドワークとして現場訪問を担当しました。コロナ禍が襲来してしばらくラキネット運動は休止状態となりましたが、一昨年からブラジル研修旅行を再開し、新たな運動体を模索中です。

夫の没後09年より、今度は単身でペルナンブコ州オリンダ市の貧困地区に所在するアルト・ダ・ボンダージ・メソジスト教会に赴任。それは日本人のいない、日本語を話さないブラジル人教会で、そこで初めてブラジルの抱える深刻な社会問題の現実に向き合いました。圧倒的な不自由と孤独と無力に直面しました。けれども教会の信徒たちの愛情深い交わりの中で過ごすうちに、新たに主イエスと出合い、信仰を再生させられたのです。教会に集う人々は社会の中で存在しないかのように無視されている民衆（ボーボ）ですが、シンプルで強い信仰によって困難な生活状況を助け合つて生きています。

「私はあると言う名前の神さまに叫び求めていると、その人が存在する者になっていく」。旧約学者の木田猷一先生の言葉です。北東部（ノルデスチ）の民衆は植民地時代の奴隷制の負の遺産で非人間化された状況に閉じ込められています。私が「奴隷の家から解放する神」を霊的に直感し、神さまにすがりついて生きています。困窮する貧しい民衆の存在が基盤となつて、解放の神学が南米から生まれたとされています。彼らのかのじよりは、現代社会における福音宣教の主人公として存在していると再認識しました。アルゼンチン出身の教皇フランシスコも同様のことを言われたので、大いに共感し勇気づけられました。

オリンダを去つて、16年からバイーア州のサルバドール市に所在するヴァレリオ・シルヴァ合同長老教会に赴任しました。サルバドールは植民地時代のブラジルの首都で、奴隷売買の拠点でした。ヴァレリオ教会は広大な貧困地区の高台に建っていて、高齢の信徒が上つて来るのは困難でしたし、新しい人の参加も望めません。そこで平地に新会堂を建てる計画を立ち上げ推進。市政府との交渉で忍耐の3年を過ごし、やっと工事が始まつたらコロナが襲つてきました。それでも多くの日本の教会からの祈りと支援によつて、私の任期が終了する直前、22年11月に献堂礼拝を捧げることができたのです。寡黙な宣教師がそこに居るだけで地球の両側を結ぶ宣教協力が実現し、大きな喜びと感謝に満たされました。

ヴァレリオ教会が所属する合同長老教会は、70年代に旧長老教会執行部が軍政を容認していることを批判して、教団から追放された牧師や信徒たちが連合してできた教会です。長老派で最小のグループですが、ブラジル教会協議会（CONIC）に加盟していて、カトリック教会もその協議会の一員です。

サルバドールでは、様々な不正や差別を生み出す社会を変革するために、諸教会が市民運動とも連帯しつつエキメニカルに挑戦していく宣教の在り方を体験しました。その運動の担い手たちの間に復活のイエスが臨在していると実感。こころ燃やされる思いを味わいました。その喜びと希望を日本の教会と共有したいと願つてやみません。

2025年度 資金収支計算書

2025年 4月 1日から
2026年 3月 31日まで

学校法人 東京神学大学
(単位：円)

収入の部	科 目	予 算	決 算	差 異
教育活動による資金収支	学生生徒等納付金収入	42,730,000	42,737,870	△ 7,870
	手数料収入	1,280,000	1,420,100	△ 140,100
	手数料収入	305,610,000	307,220,459	△ 1,610,459
	寄付金収入	41,602,000	44,031,000	△ 2,429,000
	補助金収入	41,602,000	44,031,000	△ 2,429,000
	国 庫 補 助 金 収 入	0	0	0
	資産売却収入	3,420,000	3,235,572	184,428
	付随事業・収益事業収入	24,820,000	26,103,942	△ 1,283,942
	受取利息・配当金収入	12,953,340	12,610,602	342,738
	雑収入	0	0	0
	借入金等収入	21,800,000	21,926,000	△ 126,000
	前受金収入	156,813,335	156,974,165	△ 160,830
	その他の収入	△ 25,692,020	△ 25,736,365	44,345
支出の部	資金収入調整勘定	135,809,808	135,809,808	0
	前年度繰越支払資金	721,146,463	726,333,153	△ 5,186,690
	収入の部 合 計			
	科 目	予 算	決 算	差 異
	人件費支出	226,909,200	224,000,014	2,909,186
	教育研究経費支出	70,219,000	60,989,798	9,229,202
	管理経費支出	40,038,000	32,610,154	7,427,846
	借入金等利息支出	0	0	0
	借入金等返済支出	0	0	0
	施設関係支出	2,170,000	2,161,500	8,500
	設備関係支出	45,520,000	44,452,017	1,067,983
	資産運用支出	271,027,500	270,027,500	1,000,000
	その他の支出	9,555,432	9,643,983	△ 88,551
支出の部 合 計	〔予 備 勘 定〕	2,000,000	2,000,000	0
	資金支出調整勘定	△ 26,061,880	△ 25,915,990	△ 145,890
	翌年度繰越支払資金	69,769,211	98,364,177	△ 28,594,966
	支出の部 合 計	721,146,463	726,333,153	△ 5,186,690

2025年度 活動区分資金収支計算書

2025年 4月 1日から
2026年 3月 31日まで

学校法人 東京神学大学
(単位：円)

収入	科 目	金 額
教育活動による資金収支	学生生徒等納付金収入	42,737,870
	手数料収入	1,420,100
	手数料収入	99,981,747
	一般寄付金収入	165,053,712
	経常等補助金収入	40,429,000
	付随事業収入	3,235,572
	雑収入	12,598,152
	教育活動資金収入計	365,456,153
	人件費支出	224,000,014
	教育研究経費支出	60,989,798
	管理経費支出	32,598,590
	施設整備等活動資金支出計	327,588,402
	差引	37,867,751
施設整備等活動による資金収支	調整勘定等	△ 1,500,502
	施設整備等活動資金収支差額	36,367,249
	科 目	金 額
	施設設備費寄付金収入	42,185,000
	施設設備補助金収入	3,602,000
	施設整備等活動資金収入計	45,787,000
	施設関係支出	2,161,500
	設備関係支出	44,452,017
	施設整備等活動資金支出計	46,613,517
	差引	△ 826,517
	調整勘定等	14,084,790
	施設整備等活動資金収支差額	13,258,273
その他の活動による資金収支	小計（教育活動資金収支差額＋施設整備等活動資金収支差額）	49,625,522
	科 目	金 額
	第3号基本金引当特定資産取崩収入	99,090,500
	減価償却引当特定資産取崩収入	57,142,000
	退職給付引当特定資産取崩収入	545,860
	預り金受入収入	160,830
	小計	156,939,190
	受取利息・配当金収入	26,103,942
	過年度修正収入	12,450
	その他の活動資金収入計	183,055,582
	第3号基本金引当特定資産購入支出	99,090,500
	減価償却引当特定資産購入支出	49,937,000
	第3号基本金引当特定資産繰入支出	81,000,000
支出	授業料引当特定資産繰入支出	0
	減価償却引当特定資産繰入支出	40,000,000
	退職給付引当特定資産繰入支出	0
	預り金支払支出	0
	仮払金支払支出	87,671
	小計	270,115,171
	過年度修正支出	11,564
	その他の活動資金支出計	270,126,735
	差引	△ 87,071,153
	その他の活動資金収支差額	△ 87,071,153
	支払資金の増減額（小計＋その他の活動資金収支差額）	△ 37,445,631
	前年度繰越支払資金	135,809,808
	翌年度繰越支払資金	98,364,177

2025年度財務情報の公表について
財務理事 高橋 潤

日頃より学校法人東京神学大学を覚えて祈りと宝をもってお支えいただき感謝を申し上げます。2025年度、多くの寄付金によって支えられました。

毎年度、「私立学校法」及び「学校法人会計基準」に基づいて計算書類をホームページおよび学報において公表しています。本学の財政上の最も大きな特徴は寄付金比率の高さにあります。本学は日本で一番小さな大学でありながら、全国の私学財政が寄付金比率5%のところに、本学は約70%です。対して学生納付金比率は全国の大学が70%強のところ、本学は約11%となっています。これは、全国の諸教会はじめ信仰者の祈りの賜物です。

特に2025年度は昨年に続きの遺贈等の献金が寄せられました。信仰の遺産を感謝して用いることができました。しかし、現実には毎年度、約3500万円の赤字体質から抜け出すことができないのが現状です。加増ください。

現在大切なことは、伝道献身者です。学生数の推移は2021年度73名、2022年度73名、2023年度72名、2024年度75名、2025年度73名です。財政の健全化のためにも伝道献身者が与えられるとです。受験生、入学生を迎え、教師養成が使命です。資金収支計算書・活動区分資金収支計算書は、会計年度に対応するすべての資金収入と資金支出の内容を記載し、支払資金の増減を明らかにする書類です。事業活動収支計算書は、会計年度に対応する事業活動収入と事業活動支出の内容を記載し、その収支の均衡状態を明らかにします。

貸借対照表は会計年度末時点て保有するすべての資産、負債、純資産（基本金、繰越収支差額）を記載すること、前年度会計からの増減を表示し、学校法人の財政状態を表す書類です。純資産のうち基本金は、教育環境を整えるために継続的に保持する為に必要なものとして、事業活動収入から組み入れられた金額を示しています。

第1号基本金：校地、校舎、機器、備品、図書などの固定資産を自己資金で獲得したときに組み入れられる金額です。

第2号基本金：固定資産を将来獲得する計画があるときに計画的に組み入れていくものです。

第3号基本金：計画に基づいて奨学金、教育研究基金などの資産が増加するときに組み入れます。

第4号基本金：学校法人の円滑な運営に必要な運転資金の金額で、ひと月分の運転資金に相当する金額を保持することになっています。

学校法人会計は利益追求を目的としているのではなく、充実した教育環境を整え、安定的な教育研究活動のために収支均衡を目的としています。

2025年度決算について公表し報告いたします。全国の教会・伝道所、関係学校、施設に伝道者、働き人を送り続けることが出来るように、引き続きお支えくださいますようお願いいたします。

2025年度 事業活動収支計算書

2025年 4月 1日から
2026年 3月 31日まで

学校法人 東京神学大学

(単位：円)

事業活動収入の部	科目	予算	決算	差異
	学生生徒等納付金	42,730,000	42,737,870	△ 7,870
教育活動収入の部	手数料	1,280,000	1,420,100	△ 140,100
	寄付金	264,440,000	265,035,459	△ 595,459
	経常費等補助金	38,000,000	40,429,000	△ 2,429,000
	国庫補助金	38,000,000	40,429,000	△ 2,429,000
	付随事業収入	3,420,000	3,235,572	184,428
	雑収入	12,953,340	12,598,152	355,188
	教育活動収入計	362,823,340	365,456,153	△ 2,632,813
	科目	予算	決算	差異
	人件費	250,700,000	235,361,019	15,338,981
	教育研究経費	92,769,000	80,459,825	12,309,175
事業活動支出の部	管理経費	76,248,000	68,729,436	7,518,564
	徴収不能額等	0	0	0
	教育活動支出計	419,717,000	384,550,280	35,166,720
	教育活動収支差額	△ 56,893,660	△ 19,094,127	△ 37,799,533
	教育活動収支差額			
教育活動外収入の部	科目	予算	決算	差異
	受取利息・配当金	24,820,000	26,103,942	△ 1,283,942
	その他の教育活動外収入	0	0	0
	教育活動外収入計	24,820,000	26,103,942	△ 1,283,942
	科目	予算	決算	差異
	借入金等利息	0	0	0
	その他の教育活動外支出	0	0	0
	教育活動外支出計	0	0	0
	教育活動外収支差額	24,820,000	26,103,942	△ 1,283,942
	経常収支差額	△ 32,073,660	7,009,815	△ 39,083,475
特別収支	科目	予算	決算	差異
	資産売却差額	0	0	0
	その他の特別収入	44,822,000	45,800,050	△ 978,050
	特別収入計	44,822,000	45,800,050	△ 978,050
	科目	予算	決算	差異
	資産処分差額	300,000	290,832	9,168
	その他の特別支出	14,215,703	14,215,703	0
	特別支出計	14,515,703	14,506,535	9,168
	特別収支差額	30,306,297	31,293,515	△ 987,218
	特別収支差額			
〔予備費〕	科目	予算	決算	差異
	基本金組入前当年度収支差額	△ 2,001,660	38,303,330	△ 40,304,990
	基本金組入額合計	△ 87,646,342	△ 86,587,574	△ 1,058,768
	当年度収支差額	△ 89,648,002	△ 48,284,244	△ 41,363,758
	前年度繰越収支差額	△ 351,058,301	△ 351,058,301	0
	基本金取崩額	0	0	0
	翌年度繰越収支差額	△ 440,706,303	△ 399,342,545	△ 41,363,758
	(参考)			
	事業活動収入計	432,465,340	437,360,145	△ 4,894,805
	事業活動支出計	434,467,000	399,056,815	35,410,185

2025年度 貸借対照表

2026年 3月 31日

学校法人 東京神学大学

(単位：円)

資産の部		本年度末	前年度末	増減
科目				
固定資産	有形固定資産	3,092,684,455	2,989,546,827	103,137,628
	土地建物構築物構築物教育研究用機器備品管理用機器備品図書	1,680,621,947 147,500,000 859,957,227 69,395,246 37,782,974 303,220	1,690,513,459 147,500,000 899,408,105 77,856,897 9,863,760 942,649	△ 9,891,512 0 △ 39,450,878 △ 8,461,651 27,919,214 △ 639,429
特定資産	その他の固定資産	1,410,682,660	1,297,433,520	113,249,140
	流動資産	1,379,848	1,599,848	△ 220,000
流動資産	現金預金	113,934,596	142,357,262	△ 28,422,666
	未収入金	98,364,177	135,809,808	△ 37,445,631
貯蔵品	貯蔵品	8,136,345	34,975	8,101,370
	前払金	7,334,523	6,500,599	833,924
資産の部合計	仮払金	11,880	11,880	0
		87,671	0	87,671
負債の部	資産の部合計	3,206,619,051	3,131,904,089	74,714,962
	負債の部			
科目		本年度末	前年度末	増減
固定負債	長期未払金	122,086,662	105,763,920	16,322,742
	退職給与引当金	16,560,170	1,419,990	15,140,180
流動負債	未払金	105,526,492	104,343,930	1,182,562
	前受金	47,233,342	27,144,452	20,088,890
預り金	預り金	10,763,930	9,544,432	1,219,498
	賞与引当金	21,926,000	17,600,020	4,325,980
負債の部合計	負債の部合計	160,830	0	160,830
		14,382,582	0	14,382,582
純資産の部	純資産の部	169,320,004	132,908,372	36,411,632
	科目			
基本金	基本金	3,436,641,592	3,350,054,018	86,587,574
	第1号基本金	2,441,694,558	2,436,106,984	5,587,574
繰越収支差額	第3号基本金	968,947,034	887,947,034	81,000,000
	第4号基本金	26,000,000	26,000,000	0
純資産の部合計	繰越収支差額	△ 399,342,545	△ 351,058,301	△ 48,284,244
	翌年度繰越収支差額	△ 399,342,545	△ 351,058,301	△ 48,284,244
負債及び純資産の部合計	純資産の部合計	3,037,299,047	2,998,995,717	38,303,330
	負債及び純資産の部合計	3,206,619,051	3,131,904,089	74,714,962

入試に向けた行事のご案内

東京神学大学教授 入試担当

田 中 光

2027 年度の入学者選抜に向けて、2026 年度も、幾つかの行事を計画しておりますので、ここにご案内申し上げます。

- ① 9 月 26 日（土）に「日本伝道を担う青年の集い」を行います。昨年度は多くの方が参加してくださいました。今年度も一人でも多くの方に参加していただきたいと願っています。詳細は計画ですが、礼拝を中心にしつつ、楽しい昼食の時間、分団や証しの時間などを企画しています。会の終了後には、受験相談の時も持つ予定です。皆様の参加をお待ちしております。
- ② 12 月 5 日（土）に「オープンキャンパス」を行います。礼拝から始まり、キャンパスツアー（本館、図書館、学生寮など）、教員によるショート・レクチャー、入試説明、そして受験相談を企画しています。入試のことだけでなく、召命感のこと、学費のこと、神学校生活のことなど、何でも相談してください。受験を考えておられなくても、学校を見学してみたいという方も歓迎いたします。どうぞお気軽にご参加ください。
- ③ また、昨年度より、「体験授業」と称して、本学で日頃行われている授業を実際に体験していただける期間を設けております。今年度も同じ企画を、規模を少し拡張して計画していますので、神学の学びに興味がある方、献身を考えておられる方は、「体験授業」への参加を通して、是非神学校での学びを体験してみてください。

以上の行事についての詳細は、今後大学のホームページを通してご案内して参りますので、どうぞそちらをご覧ください。

お問い合わせの際には、以下の連絡先をご参照ください。

Tel：0422-32-4185

Fax：0422-33-0667

Email：tuts@tuts.ac.jp

（件名に「入試行事に関する問い合わせ」とご記入ください）

誰もがこれからの世界の将来について不安を抱いているこの時代においてこそ、キリストの福音を語る伝道者が必要とされています。以上の行事が、皆様にとって献身を考えるきっかけになればと願っております。

学
事
往
来

6月23日	博士課程後期課程研究発表会	9月15日	2学期開始 銀座教会 大学院修士論文提出締切
7月7日	夏期伝道実習オリエンテーション	9月18日	神学生出席教会牧師と教授会との懇談会
7月14日	夏期伝道実習壮行祈禱会	9月23日	後期始業式、始業講演
7月29日	前期授業最終日	9月24日	後期授業開始
8月1日	夏期休業開始	9月26日	日本伝道を担う青年の集い
8月2日～30日	夏期伝道実習期間		
9月7日	公開夜間神学講座		

【理事会関係】

6月22日	第217回定期評議員会、第1回臨時理事会
7月6日	大阪地区後援会
9月7日	常務理事会

公
務
出
張

6月22日	定期評議員会、第1回臨時理事会	9月7日	第572回常務理事会
7月6日	大阪地区後援会	9月14日	第263回定期理事会
9月7日	常務理事会	10月19日	第573回常務理事会
			銀座教会
			《訃報》
		下村 邦夫氏	2026年2月23日逝去されました。96歳。1993年東京神学大学大学院修了
		萩原 純一氏	2026年3月3日逝去されました。93歳。1962年東京神学大学大学院修了
		金井 創氏	2026年3月16日逝去されました

した。71歳。1983年東京神学大学大学院修了	三輪 従道氏	2026年3月16日逝去されました。85歳。1967年東京神学大学大学院修了
笠原 金吾氏	2026年5月8日逝去されました。95歳。1954年日本基督教神学専門学校本科卒業	酒匂 春美氏
2026年5月12日逝去されました。99歳。1959年東京神学大学大学院修了		

告 知 板

2027 年度 入学者選抜

「雨も雪も、ひとたび天から降ればむなく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ種蒔く人には種を与え食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉もむなくは、わたしのもとに戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げわたしが与えた使命を必ず果たす。」
(イザヤ書 55 章 10-11 節)

11月選抜

◎神学部神学科

指定校推薦型入学者選抜	募集定員 1名
出願期間	2026年11月3日(火)～11月6日(金)
試験日	2026年11月23日(月・祝)
指定校推薦型編入学者選抜	募集定員 2名
編入学者選抜	募集定員 4名
出願期間	2026年10月16日(金)～10月23日(金)
試験日	2026年11月23日(月・祝)

2月選抜

◎神学部神学科

一般選抜	募集定員 2名
編入学者選抜	募集定員 4名
出願期間	2027年1月12日(火)～1月19日(火)
試験日	2027年2月16日(火)

◎大学院 博士課程前期課程／博士課程後期課程

聖書神学専攻入学者選抜	募集定員 若干名
組織神学専攻入学者選抜	募集定員 若干名
出願期間	2027年1月12日(火)～1月19日(火)
試験日	2027年2月16日(火)・17日(水)

3月選抜

◎神学部神学科

一般選抜	募集定員 2名
編入学者選抜	募集定員 2名
出願期間	2027年2月2日(火)～2月9日(火)
試験日	2027年3月9日(火)

【資料請求・お問合わせ】

東京神学大学 教務課入試係
〒181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-30
Tel : 0422-32-4185 Fax : 0422-33-0667
Mail : tuts@tuts.ac.jp

二〇二六年七月十七日発行
東京神学大学報・三三八号
〒181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-30
東京神学大学広報委員会
電話 〇四二二-三三二四一八五
FAX 〇四二二-三三二〇六六七
郵便振替 〇〇一五〇一五〇三三三
http://www.tuts.ac.jp/